

## 日本語学習者の学習ツール使用の変遷をその学習歴から探る

— 初級から超級までの6名の留学生へのインタビュー調査に基づいて —

中村彰・鈴木智美・渋谷博子

キーワード：学習ツール、学習段階、インタビュー調査、自己モニター、自律学習

### 1. 研究の目的とその背景

本研究の目的は、日本語学習者の学習ツール使用が、その学習期間および学習段階の経過にもなつて変化するのかどうか、また変化するならば、なぜどのように変化するかを、インタビュー調査を通じて探ることである。

ICT時代における日本語学習者の学習ツールの使用状況については、これまで種々のアンケート調査によってその現状が明らかにされてきている。例えば、渋谷・清水(2017)では日本語学校で学ぶ学習者、鈴木他(2018)では予備教育課程における国費学部留学生、鈴木他(2019a)では日本国内の大学で学ぶ留学生をそれぞれ対象に、学習ツールの使用状況についての調査が行われている。また、日本国外の大学で日本語を学ぶ学習者を対象として、同様にそのツール使用状況を探るアンケート調査も行われている<sup>1</sup>。アンケート調査からは、いずれも、今日の学習者がアプリやウェブサイトなどのツールを日常的に活発に使用している様子が見てとれ、ICT環境の急速な発達とともに、日本語教育をとりまく状況にもツールの発展・普及と学習者の学習環境や学習スタイルの変化が生じ、日本語教育そのものが確実に新しい時代に入っていることがわかる。

これらの調査を通じて興味深く感じられたのは、一人ひとりの学習者が、その学習期間あるいは学習段階を通じて、どのようにツールの使い方を変えていくのかという点である。鈴木他(2019b)では、広く日本語教育に関わる人を対象に、上記(鈴木2018, 2019aなど)の調査結果をもとに、学習者のツール使用状況についての情報を共有し、それを教育に生かすことを目的としたワークショップが行われたことが報告されている。さらに、このワークショップの中では、現役大学生・大学院生の留学生を2名招き、これまでの日本語学習を通じてどのようなツールを使ってきたか、自身の経験を語ってもらうというセッションが行われている。この2名はそれぞれに日本語を学び始めたきっかけも異なるが、その学習のスタート時から、日本に留学して日本語を集中的に学んでいた頃、そして大学生・大学院生としての専門の勉強に取り組んでいる現在というように、その段階ごとに、それぞれの状況における興味・関心の中心や必要性に応じて、使用する学習ツールが変遷してきた様子について語っている。

アンケート調査においては、主に現時点において回答者がどのようなツールを使用しているかということについてまとまった量の情報を得ることができるが、一人ひとりの学習者がその学習の経過の中でどのように使用ツールを変えてきたかという変化の観点からは、詳細な設問を設定

<sup>1</sup> 鈴木他(印刷中)でその調査結果について報告を行っている。

することが難しいという点がある。このことから、本研究では、上記のアンケート調査を補完する意味でも、一人ひとりの学習者のツール使用について、その変遷をそれぞれの学習者の学習経過の観点から探ることにした。研究としては小規模なものではあるが、インタビュー調査によってそれを探ってみる。

## 2. 調査の概要

調査の概要は以下の通りである。調査協力者の情報は以下の表1にまとめた。

- (1) 実施時期：2019年1月～2月
- (2) 調査協力者：初級レベルから超級レベル<sup>2</sup>の日本語学習者6名<sup>3</sup>
- (3) 調査方法
  - ① 調査の目的および方法を説明
  - ② 同意書記入
  - ③ これまでどのように（どのような学習ツールを使って）日本語を勉強してきたかについて、半構造化インタビューを実施  
(インタビュー内容は同意の上、録音)
- (4) 調査時間：一人約1時間

表1 インタビュー調査協力者

	出身地域	日本語レベル	日本語学習歴
Aさん	東ヨーロッパ	初級	約10か月
Bさん	東南アジア	中上級～上級	約1年2か月
Cさん	東南アジア	中上級～上級	約1年2か月
Dさん	東アジア	上級	約5年
Eさん	東アジア	超級	約6年
Fさん	東アジア	超級	約12年

## 3. 調査結果

調査の結果について、表1に掲げた協力者の順に報告する。氏名は順にAさん～Fさんとし、それぞれの現在の日本語レベルと出身地域を節タイトルに示す<sup>4</sup>。

<sup>2</sup> 「超級」とは、いわゆる上級レベルを超えたレベルのことで、学部・大学院等で自立的に勉学・研究を行っていくことのできるレベルを意味する。

<sup>3</sup> インタビュー調査への協力者募集のポスターを学内に掲示し、8名の応募者の中から実際に6名に協力してもらうことができた。学期末の時期と重なったため大規模な調査を実施することは難しく、10名を限度に協力者を募集することにした。なお、調査協力者には、協力への謝礼として、クオ・カード2,000円分を渡すこととした。

<sup>4</sup> インタビュー調査協力者の出身国等については、その年度の日本語プログラム受講生の情報などから個人が特定されないよう、大まかな地域で示すことにする。

### 3.1 Aさん：初級レベル、東ヨーロッパ

Aさんは母国で大学院修士課程を修了し、2019年1月現在、東京外国語大学の研究生として学んでいる。半年前の2018年9月に来日した。専門は国際関係論である。母語のほかに、ロシア語、英語、フランス語の学習経験がある。子どもの頃から日本の漫画や映画を見て、日本文化には強い興味を持っていたとのことである。

母国では2年前の2016年夏に3か月間日本語を勉強したことがあり、今回の渡日直前にも3か月、計6か月日本語を勉強した経験がある。すべてインターネットで学習し、学校などで学ぶ機会はなかったとのことである。来日後は、東京外国語大学で開講されている交換留学生や研究生等の留学生を対象とした全学的な日本語プログラムを受講しており、レベルは現在初級後半である。

渡日前の日本語学習で主に利用したのは、国際交流基金が提供している「JFにほんごeラーニングみなと」<sup>5</sup>という日本語学習サイトである。自身で探して、このサイトを使うことにした。「みなと」は、コミュニケーションのための日本語（聞く、話す、読む、書くの4技能）を総合的に学ぶことができるeラーニング教材である。Aさんは、このサイトの主たるコースである「まるごとコース」<sup>6</sup>を使い、週4日程度日本語を学習した。動画、スライド教材、クイズを使ってインタラクティブに読解や聴解の練習をしたり、日本文化を学ぶ单元では、俳句、華道、漫画についても学習した。話す練習では動画に合わせて日本語を発話したり、動画を見ながら自分の声を録音したりすることもできる。

Aさんは、まず、このサイトで、ひらがな、カタカナから学習を始め、次に順に「A1-1」「A1-2」「A2-1」<sup>7</sup>とレベルごとの学習を進め、現在も「A2-4」のレベルを継続して学習中である。これは東京外国語大学で開講されている上記日本語プログラムの初級後半（200）～中級前期（300）レベルに相当し、Aさんが現在同プログラムで学んでいるレベルと一致する。

現在はこの「みなと」に加えて、スマートフォン（Android OS）用の漢字学習アプリである「Japanese Kanji Tree」<sup>8</sup>を使っている。母国では別のアプリを使っていたが、「Japanese Kanji Tree」は様々なレベルの漢字が提供されていて便利なので使用することにしたとのことである。例えば、日本語能力試験（JLPT）のレベル別や、学年別漢字配当順<sup>9</sup>に漢字が学べる。また漢字の読み書きだけでなく、聴解も学習でき、辞書アプリの「Takoboto」<sup>10</sup>ともリンクしており便利であるとのことである。日本語の表現について「Japanese Kanji Tree」で調べてもわからない時は、コンピュータで「jisho」という日英辞書サイト<sup>11</sup>にアクセスして調べている。

<sup>5</sup> <https://minato-jf.jp/>

<sup>6</sup> 「まるごとコース—日本のことばと文化をまるごと学ぼう—」（<https://kansai.jpf.go.jp/ja/news/2016/07/jfe-httpsminato-jfjp.html>）

<sup>7</sup> コース名の最初に付けられた「A1」「A2」というのはCEFRのA1、A2レベルに相当するということを示す。「A1」「A2」は基礎段階の言語使用者であることを示すレベルである。「まるごとコース」ではそれぞれのレベルがさらに枝番「-1」「-2」が示すように段階別に分かれている。

<sup>8</sup> <https://play.google.com/store/apps/details?id=com.asji.kanjitree&hl=ja>

<sup>9</sup> 文部科学省の「学習指導要領」によって示される初等教育（第一学年～第六学年）における学年別学習漢字の一覧である。

<sup>10</sup> <https://play.google.com/store/apps/details?id=jp.takoboto&hl=ja>

<sup>11</sup> <https://jisho.org/>

Aさんは、さらに「Manga Sensei (漫画先生)」<sup>12</sup>というポッドキャスト<sup>13</sup>を聞いて日本語を学習している。「Manga Sensei (漫画先生)」は1回5分程度の長さの音声番組で、スポット的に日本語の表現や文法項目を取り上げて<sup>14</sup>英語により説明している。Aさんはこれを文法の復習に利用しているとのことである。アプリ「Japanese Kanji Tree」もこの「Manga Sensei」で紹介されていたとのことである。

以上のように初級レベルのAさんは、現在、大学内の日本語クラスで学ぶとともに、来日前から活用しているeラーニングサイトを使って、継続して自学も続けている。Aさんは、オンラインコースは自分の時間に合わせて学習できるということで、自分に合った学習方法であると評価している。

### 3.2 Bさん：中上級～上級レベル、東南アジア

Bさんは、東京外国語大学留学生日本語教育センター国費学部留学生予備教育プログラムに在籍する学生である。日本政府（文部科学省）奨学金留学生としての採用が決まり、母国の大学を中退して、来日した。外国語については、高校生の時に学習塾で中国語を学習した経験があり、母国の大学ではフランス語が必修であったため、科目によってはフランス語で授業を受けた経験もある。

来日前は、日本留学が決まってから、2～3か月の間、1週間に5日（1日2時間）、語学教室で漢字を含め日本語を学習した。日本政府（文部科学省）奨学金留学生の採用が決まった学生の多くは、毎年、渡日前にこの教室で日本語を学び、準備するという。

来日後、日本語の文法の勉強は、新出の文型についてはどんな品詞の語がどんな活用形で接続するのかという点などに注意を払いながら、教科書付属の英語による文法説明書を確認し、教科書の例文を読むという方法で進めた。特に似た意味の表現も多くなる中級レベルの文法を勉強する時には、同じ活用形が接続する文型を表にまとめて整理したり、意味・機能ごとにまとめて覚えるようにしたとのことである。

漢字は、中国語を学習した経験もあるので得意であり、書き方には特に問題はないということである。漢字の覚え方のヒントを得ることのできるウェブサイト「Kanji Koohii」<sup>15</sup>を活用している。学習アプリによるフラッシュカードは作らず、漢字とその読み方を紙に書き、読み方を隠したり漢字を隠したりしながら、練習しているということである。文法のわからないところを調べたり、聴解の練習をしたりするために、自分で見つけたサイト「jTest4you」<sup>16</sup>も利用している。

辞書アプリは、「Jsho」<sup>17</sup>を初級から中級の時よく使用していたが、意味の説明が少ないため、

<sup>12</sup> <https://manga-sensei.com/podcast/>

<sup>13</sup> ポッドキャスト (Podcast) とは、ウェブ上にアップロードされた様々な音声データの集まりで、そのサイトにアクセスするか、あるいは専用のアプリを使って、スマートフォン、コンピュータ、携帯型音声プレーヤー等にダウンロードし、視聴することができる。

<sup>14</sup> 例えば助動詞「は」と「が」、文末の助動詞「べきだ」と「はずだ」などの文法に関するトピック、「楽しみにしています」「～てください」など表現に関するトピック等が見られる。

<sup>15</sup> 例えば「好」という漢字について、「A woman 女 is fond of her child 子」という例が示されている。(https://kanji.koohii.com/)

<sup>16</sup> 日本語能力試験の級別に読解や聴解、語彙などの練習問題を利用することができる。(https://japanesetest4you.com/)

<sup>17</sup> <https://play.google.com/store/apps/details?id=ric.Jsho&hl=ja>

現在は「takoboto」<sup>18</sup>を使っている。ただし、「Jsho」は、1つの漢字を調べると、その漢字を使った様々な語彙が出てくるのが良い点であるという。これは次に述べるCさんも同様のことを述べている。

### 3.3 Cさん：中上級～上級レベル、東南アジア

CさんはBさんと同じく、東京外国語大学留学生日本語教育センター国費学部留学生予備教育プログラムに在籍する学生である。中華系にルーツを持ち、小学校2～3年生時はインターナショナルスクールで英語のほかに中国語も習っていた。外国語学習が好きだという。

来日前には、日本政府（文部科学省）奨学金留学生の採用試験を受験する1か月前と、採用決定後に3か月、計4か月間日本語を学習した。現地の語学学校で使われている日本語教材について情報を収集して、一般的によく使われている初級日本語教科書『みんなの日本語』I・IIを購入し、自学自習でこれを終えた。この教科書には英語による文法解説、語彙リスト、本文の音声CDも付属しており、シャドーイング練習もし、漢字800字も独学で学習した。

来日後は、予備教育プログラムで使用した初級教材についても、付属の音声CDでシャドーイング練習をしていたとのことで、後輩の留学生にもシャドーイング練習は勧めたいということである。

日本語では、漢字学習が最も好きであり、何回も紙に書いて練習し、書き順がわからない時はアプリやウェブサイトで調べるという方法をとっている。言葉の意味がわからない時は、辞書で調べ、それでもわからない時は先生に聞くとのことである。中上級レベルに入った現在は日日辞書も使うようになっている。また、聴解の練習問題などは音声の再生スピードを変えてやってみるなど、工夫しながら学習している。

Cさんは、今回のインタビュー調査に参加するにあたって、自分がふだん勉強に使用するアプリやウェブサイトを一覧にまとめ、資料として持参するなど、勉学に関連するあらゆる事柄に関して、前向きに積極的に取り組む姿勢を持っていることがうかがわれた。

Cさんがよく使うアプリやウェブサイトは、日英辞書サイトの「jisho」<sup>19</sup>、総合的な辞書サイト「コトバンク」<sup>20</sup>、同じく総合的な辞書サイト「weblio」<sup>21</sup>、上記のBさんも挙げていた辞書アプリ「Takoboto」、「Jsho」、また翻訳サイト・アプリの「Google Translate」<sup>22</sup>だということである。

Cさんの評価では、これらのよく使うツールの特徴は以下の通りである。まず「jisho」は、漢字の書き順がアニメーションで出る点、漢字の意味も載せている点、読み方が複数ある場合にどの語はどの読み方かを示している点など、漢字の勉強に適している。一方、例文に用いられている語や文法が難しく理解できない場合もある。「コトバンク」は、収集されている語が多く、「jisho」で見つけられなかった語も載っていることがあるが、レイアウトが良くない点に不便を感じてい

<sup>18</sup> 注10を参照

<sup>19</sup> 注11を参照

<sup>20</sup> 朝日新聞出版、講談社、小学館などの複数の辞書から用語の検索ができるサイトである。(https://kotobank.jp/)

<sup>21</sup> 国語辞典、英和・和英辞典、類語・対義語辞典などの辞書が検索できるサイトである。(https://ejje.weblio.jp/)

<sup>22</sup> https://translate.google.com/?hl=ja

る。「weblio」は類語が多く出てくるため、類語辞典として良い。「コトバンク」と「weblio」は教師から紹介されたものだけということである。また、「Jsho」は、Bさんと同様、初級レベルでは使っていたが、説明が少ないため、中上級レベルの現在はあまり使わず、英語の意味説明が豊富な辞書アプリ「Takoboto」を最もよく使っている。「Google Translate」は音声での翻訳が可能な点が便利であるが、時々意味の訳が不正確な点を不便だと感じているという。

### 3.4 Dさん：上級レベル、東アジア

Dさんは東アジア出身の留学生で、現在、東京外国語大学の研究生である。東京外国語大学で開講されている全学的な日本語プログラムでは上級レベルのクラスを受講している。日本語学習歴は約5年間である。

母国の大学で日本語を専攻していたが、1～2年生の時は実はあまり勉強に興味を持てず、成績も良くなかったとのことである。転機になったのは、1年生の冬休みだという。1年生の学年末試験の成績がかなり悪かったことから、このままではいけないと考え、自身で「江戸网校」<sup>23</sup>というインターネットスクール（以下、「ネットスクール」とする）を見つけ、学校の授業以外に自分でも日本語を勉強するようになった。2年生の冬休みまでの間、約1年間、このネットスクールで自学を続け、日本語の基礎力をつけることができたという。ネットスクールで勉強したレベルは、日本語能力試験で言うと、初級後半のN4レベルから中級のN3～N2レベルに当たる。最終的には大学4年生の時に日本語能力試験N1レベルにも合格し、1年生の時とは逆に、他のクラスメートよりも成績が良くなったとのことである。大学4年生の時には、日本に留学して大学院に進学したいという目標も持つようになった。

Dさんが受講していたネットスクールの日本語コースでは、Dさんの母国人の教師、あるいは日本人の教師によるいろいろな授業が開講されている。Dさんは有料の授業を受講した。授業を視聴するだけでなく、学習者同士で学習についてチャットしたりすることもできる。大学の日本語専攻においては、日本語だけでなく日本文化、日本文学、日本社会などについても学ぶが、このネットスクールでは、主として文法や語彙など、言語としての日本語に関する学習コースが設置されている。母国人の教師は、一般的にその母語で文法等の解説を行い、日本人の教師はその文法項目を実際にどう使うかという観点から、会話などの運用練習を行う授業を開講している。

受講についてのモデルスケジュールもあるが、受講後の試験や合否判定などはなく、基本的には受講者が自分のペースでコースを選び、順にサイトを視聴していけばよい。Dさんは45分の授業を1日1つ受けるというペースで進めた。このようなネットスクールは自律学習型のコースであるため、自分で学習したいという人には向いていると思うとDさんは述べている。

また、このスクールの良い点は、授業を開講している教師とは別に担当教師という役割の教師がいて、ウェブを介して質問や相談ができることであるという。担当教師の役割は、受講生たちの学習の状況や学習の問題を把握することとされており、Dさんはこの担当教師と密に交流できた点がとてもよかったとしている。この教師がいなかったら、長い間ネットスクールで学習を続けるのは難しかったかもしれないとのことであった。

---

<sup>23</sup> 英語、ドイツ語、フランス語、日本語、韓国語などの外国語のコースのほか、小学校などの入学試験準備などにも対応したコースを提供しているインターネットスクールである。(https://class.hujiang.com)

3～4年生になると、大学で使用していた教科書に音声教材が付属していなかったことから、ウェブサイト「OJAD (オンライン日本語アクセント辞書)」<sup>24</sup> を使って発音やイントネーションを調べたりするようになった。会話の試験や発表課題の準備をする時などにもこれを使った。また、自身の日本語レベルを確認するために、ウェブサイトで公開されている「J-CAT」<sup>25</sup> や、「SPOT」<sup>26</sup> などの試験（筑波大学開発）も自分で受けてみたということである。ほかに、インターネット上の「江戸 CCTalk」<sup>27</sup> という教育プラットフォームを使って「初級日本語の会話練習をしよう」という教室を開講し、大学の後輩たちに参加を呼びかけ、スライド教材を使って数回の授業を行ったという経験もある。

大学では、先生に電子辞書を勧められ、1年生の時から購入して使っていた。日本語の言葉の意味を確認する時は、主に国語辞典を使っていたという。大学ではスマートフォンの無料アプリ等を使うことは推奨されていない。無料の辞書アプリには語の説明に間違いも多いので、学習の際に電子辞書を使うようにという助言は適当だと思えるということである。

大学を卒業した後、来日し、日本語学校で日本語を学び、主に会話能力と書く能力を高めた。日本語学習に役立つサイトやアプリ、便利なツール等をまとめて紹介している「NIHONGO e な」<sup>28</sup> のページも見erようになったということである。その後、東京外国語大学の研究生として学んでいる。

### 3.5 Eさん：超級レベル、東アジア

Eさんは、現在、東京外国語大学大学院で学んでいる東アジア出身の留学生である。母国の大学では日本語を専攻した。東京外国語大学における研究生の期間および大学院に入学してからの期間も含めて数えると、日本語学習歴は約6年間になる。

日本語の勉強は大学に入ってから始めたが、1年生の時の学習内容はあまり難しくなかった。2年生後半頃からは大学のルームメートの影響を受けて日本のドラマなども見るようになり、日本語で会話することに憧れのような気持ちも持ち始め、卒業後、日本の大学院に進学したいと考えerようになった。3～4年生になると、語学教育のプラットフォーム「江戸」<sup>29</sup> にアクセスして、日本文化をはじめ日本に関する知識、また日本語能力試験に関する情報も収集した。1週間に1～2回は同サイトにおけるインターネット授業も視聴して文法の復習などに利用していた。Eさんは主に無料の授業を視聴し、スケジュールは特に立てず、見たい時に視聴していたということである。また、同サイトでは日本語によるニュースを字幕付きアプリで聞くこともできるとのことである。また、来日後も継続して聞いている。

<sup>24</sup> このサイトの中の「韻律読み上げチュータ スズキクン」を使うと、入力した任意の文章（テキスト）について、そのアクセントやピッチパターンが表示され、読み上げ音声も聞くことができる。（<http://www.gavo.t.u-tokyo.ac.jp/ojad/>）

<sup>25</sup> 「J-CAT 日本語テスト」は、日本語学習者の日本語能力を判定するオンラインテストである。（<http://www.j-cat.org>）

<sup>26</sup> 通称「SPOT」と呼ばれるテストは、「筑波日本語テスト集 TBJ」における日本語力判定テストのことである。（<http://ttbj1.cegloc.tsukuba.ac.jp/apply/ agree/>）

<sup>27</sup> <https://www.cctalk.com/download/>

<sup>28</sup> <https://nihongo-e-na.com/jpn/>

<sup>29</sup> 前述のDさんが利用していたインターネットスクールと同じ会社が運営するものである。

Eさんは、大学4年生の時にちょっとした挫折経験を味わったという。日本語能力試験を受験したところ、N2レベルには合格したもののN1レベルに不合格だったということである。また、留学を視野に入れていたため、4年生の夏休みに1か月半程度、日本語の塾にも通ったが、周囲の受講生よりも自分の会話力が低いことに気づいて落ち込んだ。それまで大学では文法、語彙、読解を中心に勉強していたが、聴解や会話はあまり重視していなかったことに気づかされた。

しかし、自分の弱点に気づいた後は、これまでとは異なる勉強方法にも力を入れるようになった。自然な日本語にできるだけ触れ、理解し、話せるようになるようにと、日本のドラマを多く見るようにした。少し古いドラマでは、Eさんの母語の字幕しか表示できないが、ドラマにおける会話等を自分で翻訳し、母語の字幕でチェックする練習をした。比較的新しいドラマでは日本語の字幕表示が可能なので、日本語を聞き、繰り返して発話し、最後に日本語の字幕で確認するという練習を続けた。内容に興味を持つことができ、好きな俳優が出演しているドラマを選んで視聴していたという。

また、日本語能力試験N1合格を目指して、勉強も続けた。4年生になると学校の授業は少なくなるが、自分で参考書を買って、N1レベルの語彙・文法の勉強を行った。聴解や読解の問題集も購入し、毎日必ず1課ずつ勉強したという。さらに、より高い日本語力を身につけようと、思い切って日本に留学し、日本語学校で1年間勉強することにしたそうである。日本語学校では教師が日本語母語話者であることから、会話力が少しずつついてきていることを感じたとのことである。これらの努力が実り、日本語能力試験N1レベルにも無事合格し、その後、東京外国語大学の研究生を経て、大学院に入学した。

### 3.6 Fさん：超級レベル、東アジア

Fさんも、現在、東京外国語大学大学院で学んでいる東アジア出身の留学生である。中学校から高校までの6年間、外国語学校で日本語を学んだとのことで、日本語学習歴は、大学院の課程も含めて考えると通算で12年間になる。

外国語学校では、英語・日本語・ロシア語の中から日本語を選択した。週に1回は日本語母語話者の教師による日本文化や会話などのクラスがあり、楽しかったという印象を持っている。中学校の3年間の勉強のスピードはさほど速くなかったが、高校の3年間は日本語能力試験の合格を目指してかなり勉強したとのことである。中級レベル以降は類似の文法項目も多くなるため、接続の形や共起表現などにも注意を払い、自分でノートを作って、覚えるようにしていた。高校卒業時には日本語能力試験N2レベルに合格した。

高校卒業後、母国の大学の日本語専攻に進学したが、大学では既習者を対象としたクラスは開講されていなかったため、大学から日本語を学び始めた同級生たちと同じクラスで学ぶことになった。既にN2レベルに到達しているFさんにとっては学習内容は易しく、大学3年間の勉強は暇に感じることもあったという。大学4年次はインターンシップ等の時期となっており、授業も行われないため、東京の日本語学校に留学することにした。留学中に日本語能力試験N1レベルにも合格し、大学院の入学試験にも合格して、大学院に入学することとなった。

このように順調に日本語の学習を進めてきたように見えるFさんだが、日本語学校に入学した時には、クラスメートと比べて自分は話す力が弱いように思ったということである。しかし、日本語学校では、毎日クラスで発表する活動もあり、勉強になったという。日本語学校の卒業発表



の準備の際には、前述のDさんと同じく「OJAD（オンライン日本語アクセント辞書）」を使って発音やイントネーションの確認をした。また、日本に来てからは、国際交流基金によるeラーニングサイト<sup>30</sup>なども活用するようになった。

中学校および高校では、勉強にスマートフォンは使わず、高校の時には教師の勧めで電子辞書を購入して使っていた。大学入学後は翻訳アプリなども使うようになったが、的確な訳が表示されない場合が多いと感じたという。日本語学校で学び始めてからは、アカデミックな日本語を書く必要が生じた時などは、例えばYahooの検索サイト<sup>31</sup>などで「論文の書き方」「研究計画」「メールのやりとり」などのキーワードを検索して参考になる情報を探すようにしたということである。

日本語を勉強している人たちに日本語学習についてアドバイスするとしたら、Fさんは、多様なリソースを利用すると学習のモチベーションも上がるので、リソースを積極的に活用するようにとアドバイスしたいとのことである。日本文化の体験活動に参加したり、留学したりすることも、広い意味でリソースの活用である。また、特にアカデミックな場面では、人的なリソースとしての教師は重要で、大学院で修士論文などを執筆する際には、指導教員からのフィードバックは大切だと述べている。

Fさんは自分自身を、1つずつ目標を立ててチャレンジしていくタイプであると分析している。常に目標を決めて勉強を続け、大学院在学中には、日本語教育能力検定試験<sup>32</sup>にも合格している。今後も、就職後に役立つ資格を取得するなど、目標を決めて進んでいきたいという抱負を述べていた。

#### 4. まとめ

本研究では、初級から超級レベルまでの6名の学習者へのインタビュー調査を通じて、日本語学習者の学習ツールの使用が、その学習期間あるいは学習段階の経過にもなって変化するのか、また変化するならば、なぜどのように変化するのかを探ることを試みた。

調査の結果からは、狭い意味でのツール使用だけではなく、学校などの選択も含めた広い意味での学習者の学習方法が、その学習の段階に応じて変化していくようすが見てとれた。また、そのような変化は、学習者がそれぞれの学習段階において自身の日本語習得状況を自己モニターし、それぞれの段階において自身が必要とするものに気づくことによってもたらされていることがわかった。さらに、日本語学習を長期間にわたって継続し、あるいは集中的な学習コースにおける学習を最後まで修了し、結果的に自身が設定する目標レベルの日本語力を習得することに成功しているのは、それぞれが自身のスタイルに合った学習方法によってその学習を継続させていくことに成功していることの結果であるということがわかった。自身のスタイルに合った学習方法というのは、インターネット等のツールの使用であることもあるし、広い意味で、それまで学んできた学校等とは異なる環境で学ぶことを選択や、異なる教授方法のクラスに身をおいて学んでいくことなども含む。

<sup>30</sup> 「まるごとeラーニング」では、日本語教材『まるごと』（国際交流基金編著）の学習をサポートする種々のeラーニングサイトが紹介されている。（<https://www.marugoto.org/e-learning/>）

<sup>31</sup> <https://www.yahoo.co.jp>

<sup>32</sup> 公益財団法人日本国際教育支援協会が行う試験で、日本語教師としての基礎的な知識・技能を検定することを目的とする試験とされる。（<http://www.jees.or.jp/jltct/> 2019年11月閲覧）

現在、アプリやウェブサイトなど、日本語学習に役立つ学習ツールの種類は豊富にあり、インターネットを自由に使用できる環境さえあれば、それらのツールに容易にアクセス、あるいはそれらを手し、学習に活用することが可能な状況となっている。上記のインタビュー調査の結果は、このような状況の中で、それらのツールの活用を学習の成功につなげることができるかどうかは、学習者自身が自分に合ったツールを上手に選択し、活用していくことにあり、学習者自身の自律学習リテラシーの向上が何よりもツール活用を成功に導く鍵となるのだということを示唆している。そのために必要なのは、学習者自身が、それぞれの段階において自分に必要なものは何かを的確にとらえていく力である。日本語教師は、今後、このような点について、学習者の良きアドバイザーの役割を果たすことが求められていくのではないだろうか。

(執筆分担：3.1 中村、1, 2, 3.4～3.6, 4 鈴木、3.2～3.3 渋谷)

付記：本研究は以下の助成を受けて行われたものである。

日本学術振興会学術研究助成金平成 29 年度～31 年度基盤研究 (C)「日本語学習者の学習ツール使用状況の解明と教師の教育支援リテラシーを結ぶ総合的研究」(課題番号：17K02842, 研究代表者：鈴木智美、研究分担者：中村彰、清水由貴子、渋谷博子、藤村知子)

#### 引用文献

- 渋谷博子・清水由貴子 (2017)「日本語学習者および教師への学習ツールに関する調査—デジタル時代の教師の役割とは—」『日本語教育研究』63号 pp.34-49
- 鈴木智美・清水由貴子・渋谷博子・中村彰・藤村知子 (2018)「予備教育課程の国費学部留学生の学習ツール使用状況—2016～2017年度実施のアンケート調査の結果から見えるスマートフォンアプリの使用目的の多様化と学習スタイルの変化—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第44号 pp.195-217
- 鈴木智美・清水由貴子・渋谷博子・中村彰・藤村知子 (2019a)「東京外国語大学全学日本語プログラムで学ぶ留学生の学習ツール使用状況—2016～2017年度実施のアンケート調査の結果と分析—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第45号 pp.221-238
- 鈴木智美・中村彰・清水由貴子・渋谷博子 (2019b)「ICT時代の日本語学習者はどのような学習ツールを使っているか—日本語教師を対象としたワークショップ実施報告—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第45号 pp.239-255
- 鈴木智美・清水由貴子・中村彰・渋谷博子 (印刷中)「海外の大学における日本語学習者のツール使用状況の解明—ICT時代における教師の授業設計リテラシーの向上を目指して」東京外国語大学国際日本研究センター『日本語・日本学研究』10号

(なかむら あきら 東京外国語大学大学院国際日本学研究院 准教授)

(すずき ともみ 東京外国語大学大学院国際日本学研究院 教授)

(しぶや ひろこ クリエイティブ日本語学校 校長兼教務主任)

# **Investigating the Changes in the Uses of Learning Tools by Japanese Language Learners From Their Learning Histories:**

**Based on the Interviews with Six International Students  
Whose Japanese Levels Range from Elementary to Highly Advanced**

**NAKAMURA Akira, SUZUKI Tomomi, SHIBUYA Hiroko**

**KEYWORDS:** Learning Tools, Learning Stages, Interviews, Self-Monitoring, Autonomous Learning

The purpose of the present research is to find out whether Japanese language learners use learning tools differently according to how long they have been studying Japanese and what learning stage they are in, and if they do, why and how they change. Six international students with varying Japanese proficiency levels were interviewed for this purpose.

We have found out that they have been changing the way they study Japanese according to their learning stages. Changes are not restricted to the learners' uses of learning tools, upon which our research originally focused, but they also include the learners' learning methods in a wider sense, such as their choice of schools.

Our interviews revealed that such changes are caused because these learners monitor their own progress in learning Japanese at each stage and become aware of what they need at each stage of their learning. (self-monitoring)

Furthermore, they have studied Japanese for a long period of time, have completed an intensive course successfully, and as a result, succeed in attaining their targeted Japanese level, because they continue their learning, selecting the learning methods that are appropriate to their learning styles. (literacy in autonomous learning)

The keys to successful learning are learners' ability in self-monitoring and literacy in autonomous learning. Japanese language teachers should take these factors into account so that they can play the role of good advisers to learners.